
オーシャン

宮森すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーシャン

【Nコード】
N4455H

【作者名】
宮森すず

【あらすじ】
海辺で物思いにふける大人びた少女のお話。ファンタジー風味。

海辺にひとりの少女がたたずむ。黒髪が潮風にさらわれ、白いスカートがたわみ、そして大きくふくらんだ。

少女の名前は、クロエ。

クロエの足元、ちょうど波が寄せては返し、白い泡と黒い岩がぶつかりあう狭間に、うすい蜜色の髪の少女が沈んでいる。首から下をすっぽりと海水に覆われ、頭を黒岩にもたせかけ、目を閉じたままぴくりとも動かない。

クロエはちらりと少女をみた。長い金色の髪が水中にただよい、美しい珊瑚のようだ、と思った。

「ねえ、あなた、ねむっているの？ それとも、死んでいるの？
どちらでもいいの、わたしと、お友達になつてくれない？」

クロエはそのまましばらく待ったが、応えは返ってこなかった。
ひとつため息をついて、クロエは視線を遠くの海原へとうつした。

途切れることなく、波の音が聴こえた。地平線がなだらかな弧をえがく。この場所に立つときだけ、クロエは地球が球体であることを思い出す。

「わたしは海がすき。海をみると、何もかもが本当はともちいさくて、たよりなくて、ささいなことだとわかるから。そして形あるものは形を失い、形ないものが形をもちはじめの。時々はそれが泣きたくなるくらいさみしいけれど、大抵はなくさめられる。こころが空っぽになって、そこにどんどん潮騒が満ちて、わたしはわたしであることをわすれて、ずっとおちついて考えることができるよ。うな気がするの。海と一体になるような、大きなものに包まれているような不安と安心感が同居するのが心地いい。

あなたも、きつと海がすきなね。だから、ここにいてのね」

クロエはそこでもう一度少女を見た。少女の身体は依然として水の中につかっていたが、首までであった水位が、今は胸元にまで下が

っている。海水につかっていた肌は青白く、今にも透けてしまいうだった。

「潮が引きはじめたんだわ」

干潮になる前に、クロエは家に帰らなければならぬ。クロエはスカートについた砂を払い落とした。

砂をつけて帰ると、海に行っていたことがばれてしまう。大人たちは口をそろえて海はあぶない、と言う。溺れたらどうするの、高波にさらわれたらどうするの、と言う。クロエは泳ぐために海に来るわけではなかったから、溺れることはなかったし、心をおちつけるために海を見るのだから、波の高い日はここにはこない。それを何度説明しても、大人たちにはわかってもらえない。クロエはそれが不満だった。

生きていればたくさんの危険な目にあうだろう。それらすべてを回避することは不可能だ、とクロエは思う。それでも大人はクロエをそばにおきたがる。つねに目の届く範囲において、何を考えているのかを知り、行動のすべてを監視していないと気がすまないのだ。クロエにはそれが窮屈でたまらない。クロエのためだと言いなから、それはどうしても大人たちの身勝手にしか聞こえなかったからだ。

子供だからといって、考えていることが簡単にわかる、などと思わないでほしい。逆に言えば、子供だからという理由だけで、大人の言うことなどわからない、とも思わない。ただ、大人はよく、子供だからという理由で伝えようとする努力を怠るのだと思う。

「はやくおおきくなりたいな」

クロエは歌うように言った。大人になれば、ひとりで海にくることを咎められたりもしなくなるだろう。クロエが海を見ながら何かを考えているとき、何もかもわかったような顔で、

「子供は悩みがなくていいね」

なんて言われることもなくなるだろう。

大人はときどき、とても失礼になる。でも悪気がないのだとわか

るから、クロエは咎めない。ただ、悩みを相談したり、共感してもらいたいという気持ちもなかった。クロエはそこで口をつくむ。クロエは、大人がクロエのことを何でもわかつている、という顔をするのがとても不思議だ。クロエにすらわからないことがたくさんあるのに。でも、みんなわかったような気になっているだけだ、とクロエは思う。だって大人はクロエではないのだから。クロエでない人に、どうしてクロエの悩みがわかるというのだろうか。そんなことは、少し想像力をはたらかせてみればわかることだ。

「同じ悩みだって、悩む人によって大きさは変わるのに。どんな悩みだって大きくて、どんな悩みもささいである可能性がある。パパはいつもわたしにこう言うの、『心をおちつけて考えなさい、クロエ。そして、自分でない誰かになったつもりで、自分を含めたまわりを見渡してごらん。そうすればきっと、見えなかったものが見えてくるから』って。」

クロエは海に沈む少女に語りかけた。海水は少女の腰のあたりまで引いていた。岩肌に少女の金髪がしつとりとまとわりついている。「でももう、そのパパもいないわ。わたしにはまだ、パパの言葉の意味がよくわからない。ぼんやりとしかわからないの。あなたにはわかるのかしら？ あなたみたいに海につかって、一日中ずっと考えていたら、パパの言ったことがわかるようになるかしら」

そう言っただけクロエはそつと両手で顔を覆った。海鳴りが大きくなった。曇り空の浜辺に、人影は見えなかった。

クロエは声をださずにひっそりと泣いた。指の間からこぼれた涙は、潮風がさらっていった。クロエは、この世にたったひとりなのだ、と感じた。さみしくてしかたがなくなると、クロエは胸の奥からパパの言葉を探し出す。なんとか、今の気持ちを落ち着かせてくれて、さみしさを慰めてくれる言葉を。

「さみしさと仲良くなるのよ、クロエ。さみしさはいつもわたしたちのそばについてまわる影のようなものだから。何か本当に大切なことを決めるときはみんなひとりぼっちだし、世界中どこをさがし

ても同じ人間は二人といたいのだから。でも、別々の人間同士、相手をわかりあおうとすることはできるはずだわ。そのための言葉ですもの。伝えようとする努力なしで伝わるものなど何も無い。それは思い込みでしかないのね」

パパの言葉を手がかりにして、クロエはいろいろなことを考える。繰り返す海の音を聴いていると、自分の思考の流れが感じられる。こうして出た結論を、誰かに聞いてもらいたいと思つて、一度だけ話したことがあるけれど、その大人は顔をしかめて

「もっと子供らしい遊びをしたらどうだい」と、言った。

クロエは『子供らしい遊び』って何だろう、と思つた。もしかして、海には泳ぐためだけに行つて、溺れかけたり、波の高い日にわざわざ出かけて行つて高波にさらわれかけたり、そういうことを言っているのだろうか。だとしたら、クロエの答えはでている。そんなことに興味はない、だ。クロエはクロエの好きなように遊びたい。散歩をして、考え事をして、大好きな本を読んで、海をながめたい。パパがいたときは、クロエはパパに自分の考えをしゃべつた。パパはクロエをほめてくれて、もっともつとたくさんの考えを聞かせてくれた。そのたびに、意識すらしていなかった暗闇に光がさすような気がした。パパはいそがしい人だったから、あまりたくさんの時間をクロエにさいてはもらえなかつたけれど、それでも、クロエの中にはパパとの会話がたくさんつまっている。

パパがいなくなつてしまつたときは、本当になしかつた。大人はクロエにパパがいなくなつたことを隠したがつた。聞きたいことには何も答えてくれないのに、「元氣をおだし」だとか「あなたのパパは、あなたをずっと見守つてくださるわ」だとか、そういう言葉はたくさん聞いた。クロエは、パパは死んでしまつたのだ、と理解した。

そこまで思い出して、クロエは顔を上げた。その顔に涙の跡はなかった。誰も、クロエが泣いたところを見たことはない。パパを除

いては。

クロエが泣くのだということすら、大人は忘れてしまっているかもしれない。

「かえろう」

クロエはもう一度丁寧にスカートの砂を払った。長い髪は風にあおられてくしゃくしゃになっていたので、かえったらきちんと櫛をいれなくちゃ、と思った。

「ばいばい、人魚姫さん」

クロエは最後にちいさく金髪の少女に手をふって、砂浜をかけた。波打ち際は遠くなっていて、少女の身体はいまやすっかり陸の上にあった。

クロエの姿が見えなくなってしばらくしたころ。

ぴくりとも動かなかった少女が、うつすらと目を開けた。長いまつげの下に、真っ青な瞳がのぞいた。波打つ金髪に薔薇色の肌をもつ、美しい少女だった。

少女はそつと立ち上がり、クロエが残した足跡を見つめた。

「おともだち」

少女はナイチンゲールのような声でささやく。

「クロエ」

ちいさな口元に淡い微笑がぎざまれた。陽の光をはじく金髪が風にあおられ、大きくなびいた。

少女はうつとりとその言葉を反芻して、潮騒の音に耳をかたむけた。

海の音は思考の音。

波の動きは思考の流れ。

潮の満ち干きは思考のシークエンス。

寄せては返す、終わらなき思考の旅路。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4455h/>

オーシャン

2010年10月8日15時28分発行